



～CIR活用の巻～

## 「何か違うことをやってみたい！」 地域に飛び出す国際交流員

氷見市企画振興部地域協働課 荒木 春奈

### 氷見市ってどんなところ？

氷見市は能登半島の付け根に位置し富山湾に面する、富山県北西部の人口約5万2,000人の市です。「ひみ寒ぶり」に代表される海の幸と、市域の7割を占める中山間地域で育まれる里山の恵みが特徴で、その食材の豊かさから「食都（しょくのみやこ）」と呼ばれるようになりました。

市の第8次総合計画では、「人 自然 食を未来につなぐ交流都市 ひみ」を目指す都市像として、交流人口の拡大と協働のまちづくりなどを推進しています。

これまでの主な海外都市などとの交流事業としては、2000年度から、氷見市発祥で資源・環境に優しく持続可能な漁法と言われている伝統の「越中式定置網」を世界に発信するための取り組みを中心に行っています。コスタリカ共和国や中国からの漁業研修生の受け入れや、定置網新世紀フォーラムや世界定置網サミットの開催、東南アジア漁業開発センターとの連携、タイ・インドネシアJICA草の根技術協力事業などの「定置網漁業国際交流事業」を実施し、定置網（Setnet）を特に東南アジアへPRしてきました。（参考：<http://www.city.himi.toyama.jp/hp/page000001300/hpg000001219.htm>）

そのほか、2008年度には伝統文化である「獅子舞」のサンフランシスコでの公演や、2012年度に市と市観光協会、観光事業者による「どぶろく造り体験」をメインとした台湾からのモニターツアーの実施、市民団体による市民と外国人が交流する事業の支援などを行ってきました。これまで、市や国際交流協会、市観光協会などが連携し

て国際交流の推進に向けた事業を行ってきましたが、単発に近い取り組みが中心で、海外都市と継続的な友好関係を形作るまでには至っていないのが現状です。

### 氷見市でのCIRの歴史

氷見市は1994年度からCIRを配置しており、2013年度までにアメリカ、イギリス、オーストラリア、ニュージーランドから10人が赴任してきました。

CIRの主な業務としては、外国語刊行物などの翻訳・編集、市国際交流協会やユネスコ協会などと連携した国際交流事業の企画や立案、外国からの訪問客の接遇、市民への語学指導（英会話教室）などがあるほか、小学校での英語授業も担当しています。

しかし、氷見市は外国の友好都市を有していないことや、観光・交流の取り組みは国内向けが主で外国人観光客を受け入れる素地ができておらず、外国からの観光客そのものが非常に少ないことなどから、上記の業務のうち、翻訳・編集業務や接遇業務についてはほとんど実績がないのが現状です。したがって、歴代のCIRにとっては、氷見に来るまでの理想や思いと実際の業務との間に大きなギャップの種が生まれていたようです。

### 第11代 氷見市CIRの赴任と活躍

そんな中、2011年7月に、アメリカから日系アメリカ人の前田クリスティーン梨葉がCIRとして氷見市へ赴任してきました。そして、クリスティーンもまた、2年目に入る頃から業務内容にギャップを感じ始めていたように見受けられました。

しかし、それまでの「本来期待していなかった業務」が、本人の意思と周囲のバックアップにより、いつの間にか「氷見のCIR特有の業務」へと変化していきました。その大きなきっかけが、次に述べる「行政チャンネルでの番組の企画制作」であったことは間違いありません。

氷見市では、能越ケーブルネット株式会社と連携して、独自のCATV番組「行政チャンネル」を市民向けに放映しており、行政からのお知らせをメインとした番組放映を行っています。2012年春から、オリジナルの英会話番組を作ることになりました。スタジオで収録する英会話番組は過去に歴代のCIRが行ったことはありましたが、「これまでとは違うドラマ仕立てでやってみよう！」というクリスティーンの強い意向と担当職員のノリでスタートした企画でした。

番組名は『LOST in HIMI』。アメリカで人気だったテレビドラマをヒントに、シナリオはクリスティーンが起稿して担当職員がチェック、出演依頼や交渉も自らい、演技指導や撮影は能越ケーブルネットの



ドラマによる英会話番組『LOST in HIMI』ポスター（中央がクリスティーン）

行政チャンネル担当者が綿密に行いました。キャストとして市職員や市民が出演し、まさにCIR、行政、国際交流協会、市民との協働の結果できた英会話番組でした。

2012年8月から2013年3月まで全8回が放映され、出演者はスーパーマーケットなどで「(番組を)見てるよ!」と市民の方から声をかけられることも多かったといいます。『LOST in HIMI』が好評だったこともあり、2013年度も引き続きクリスティーンが企画する英会話番組「クリスティーンの突撃English!」を企画・制作・放映しているところです。この番組は、市内のさまざまな場所で、その場所や人にちなんだ英語クイズを市民に突然出題するという形態で、市民を広く巻き込んだ形での国際交流の推進に向けて、これからの展開を非常に楽しみにしています。

また、今年度からは、夏休み期間を利用したCIRとALTによる学童保育現場での英語を使った交流事業もスタートしました。CIRやALTの母国語での会話、母



学童保育現場での英語を使った交流事業

国のおやつ、ゲームなどを楽しみながら、国際交流に子どもの頃から親しむことを目的としています。今回はモデル事業として1か所のみで実施しましたが、大変好評であったため来年度からはより広く実施していきたいと考えています。さらに、



TOAとして成田空港で新規来日者のお出迎え

TOA（東京オリエンテーションアシスタント）にも参加し、東京で新規来日したCIRたちに自らの業務をPRし、自ら作っていく仕事の楽しさを存分にアピールしてきたと聞いており、市の担当として誠に誇らしく感じているところです。

## これからの氷見市とCIR

これまで、業務と関連して数人のCIRやALTを見てきましたが、やはり「CIR」、「外国人」と一口で言っても、人それぞれのパーソナリティがあり、得意分野やその思いも人によって大きく異なります。

我々行政がCIRを受け入れていくに当たっては、その個人の思いを尊重し決して枠にはめようとしないこと（当然、自治体として最低限の枠は必要ですが）、そして彼・彼女らのチャレンジしたいことを可能な限り「応援」していくことが必要だとあらためて感じています。それによって、業務とは一見異なる取り組みであっても、CIRの意欲向上、そして市民も広く巻き込んだ国際交流の推進という、結果的に「国際交流員のそもそもの目的」の達成につながっていく可能性が拓けていくことを、我々もまた教えられたのだと思っています。